

『千と千尋の神隠し』における「異郷」

——『不思議の国のアリス』『ナルニア国物語』と比較して

大野 雅子

序

映画『千と千尋の神隠し』(宮崎 駿^{はやお} 監督、2001 年)が、無国籍的な風景を描くことによって、逆説的に日本人にとってのノスタルジックな風景を現出しているという点は、あまたの論で指摘されてきた。千尋とその両親が紛れこんだ食堂街は、小さな店が軒を連ねる、昭和の香り漂うなつかしい風景のようでありながら、よくみると、かなりあやしい。看板には、「め」や「めめ」、「滋養絶倫^{じようぜつりん}」「眼精疲労」「三千眼」「生あります」などと書かれてある。「眼」が女性性器の隠喩、「生あります」の「生」が女性の肉体の隠喩である¹とは知らなかったが、そうだとすると、食堂街というよりは、これもまた昭和の昔を想起させる赤線地帯ということになろうか。両親が食べ物にかぶりつくカウンター形式の飲食店は、「大阪新世界風または東南アジア風」²でもある。彼らが豚のように食い荒らす姿は、異常な食欲をあらわすとともに、食欲が性欲と重なり合い、尽きることを知らない大人の欲望を体現するグロテスクな姿として立ちあがる。彼らが食らいつくのは中華料理風の肉の塊である。サラダや煮物ではないところが、欲望をうつしだすには最適である。

千尋は、欲望にまみれ豚に変身してしまった両親をそこに残して、異界へと移動してゆく。橋を渡った向こう側で異様な存在感を示す湯屋は、「正面は木造旅館なのに、建物の裏側の石造りは中世のヨーロッパ風、内部はアジア・中国的なイメージが強く、最上階はヨーロッパ風インテリアで埋め尽くされている」³、奇妙な建築物であった。

この世界に古き良き日本を再発見しようと思っていた観衆は、その期待を裏切られることになるであろう。『千と千尋の神隠し』の世界は、現代日本の批判として措定されているわけではない。また、後進国としてのアジア的風景を日本の昔と重ね合わせているのでもない。かといってヨーロッパやラテンアメリカ風の異国情緒豊かな世界を創りだしているのでもない。

「あらゆるものが錯綜」⁴したこの映画の世界は、しかし、不思議と我々のノスタルジアをくすぐるのだ。なぜだろう。

ここに描かれる「異郷」は、日本人の無意識の古層に存在する集団的記憶に訴えかけるのである。『千と千尋の神隠し』が描く世界は、八百万^{やおろず}の神々が疲れを癒す「常世^{とこよ}」であ

るが、同時に、豊饒の源である「根の国」、大いなる母が司る「母の国」でもある。この世界はまた「夕暮れ」という時間的な位相でもある。

この論考で検証したいのは、この映画において、「あちら側の世界」と「こちら側の世界」は、連続的に存在する二つの世界、いやむしろ、ひとつの世界の異なる様相であり、その間に乗り越えられない高い壁がそびえ立っているわけではないということである。「あちら側の世界」は、何かの拍子に迷い込んでしまうかもしれない、そんなあやしげな世界なのである。たとえば、おにぎり^{いざな}を落としたおじいさんが、鼠の浄土に誘われるように。

「あちら側の世界」は、『不思議の国のアリス』（ルイス・キャロル、1865年）においては、現実世界という枠がまわりをとり囲む夢の世界であった。夢と現実との間には確固たる境界線が引かれており、その線が揺らいだり交差したりすることはない。

『ナルニア国物語』（C・S・ルイス、1950～56年）においては、ルーシーが大きな洋服ダンスの中を通り抜けて、夜の雪を踏みしめて辿り着いた街灯がナルニア国の境界となっている。ナルニア国への入り口は、洋服ダンスの他に、駅のホームだったり、壁にかかった絵であったりもするが、神の啓示が下されるように、その入口は、予期せぬ瞬間、こちら側の世界のどこかに思いがけなく出現するのだ。

『不思議の国のアリス』と『ナルニア国物語』における「異郷」はこちら側の世界と連続的に存在しているのではない。「あちら側の世界」と「こちら側の世界」は断絶している。二つの世界の間には大きな障壁が存在しており、めったなことでそれを乗り越えることはできない。「あちら側の世界」は、資格ある者だけが特別に入場を許可される特別な場所であり、もう二度とそこに戻ることはできないかもしれない場所である。

『不思議の国のアリス』や『ナルニア国物語』と比較してみたとき、『千と千尋の神隠し』の「異郷」が「うっかり足を踏み入れたら大変だ」という思いを引き起こす場所であることは、注目すべきである。「また戻りたい」「あの国は今どうなっているのだろう」という心地よい憧憬の対照とはならない。現実世界のどこかに入口があって気をつけないと入り込んでしまうかもしれない恐ろしさを抱えている。

切れ目なく存在する二つの世界—これを日本的といってよいのかどうか。

このように、『不思議の国のアリス』と『ナルニア国物語』を比較の対象としながら、『千と千尋の神隠し』の世界のあり方を解明するのが本論考の目的である。『不思議の国のアリス』をアリスの成長物語として読むことも可能なように、『千と千尋の神隠し』も千尋の成長物語として読まれるべきなのか、千尋がトンネルを再び抜けたとき、長い時がたったかのようにみえるのはなぜなのか、という問題にもその途上で言及するつもりである。

1 『千と千尋の神隠し』は水の国

『千と千尋の神隠し』が描く世界を、「根の国」、「母の国」といったが、それを証明しなければならない。それを証明するためには、大きな回り道をして、『千と千尋の神隠し』の世界が「水の国」であることを指摘することから始めなければならない。「水の国」というのは、海中または海底に存在する国という意味である。

千尋が最初に赤い橋の欄干^{らんかん}から下をみたとき、川には水がなく、乾いた川底に敷かれた線路の上を電車が走っていた。すると突然、平安時代の水干^{すいかん}のような衣装に身を包んだ眉目^び秀麗な少年が現われる。彼が「じきに夜になる」というやいなや、薄暮をへることなく、夜の暗闇が急激に空を覆いつくす。さっきまで乾いていた川には水が満々と満ち、不気味に光り輝く一艘の船が川岸に到着する。降り立ったのは、能面のような白いお面をかぶった妖怪たちの一群であった。

季節は梅雨のようである。雨の日の印象が強いのは、雨の日にカオナシが油屋にそっと侵入し、同じ雨の日にオクサレ様が異臭を放ちながら訪れてきたからであろう。庭に咲いているのはあじさいだったが、隣にはつつじも咲いているので、この世界は、春と夏の両方が同時に存在する「地上の楽園」のような場所なのかもしれない。

雨がひとしきり降りつづき、止んだ。ある夜、仕事を終えた千尋とリンは、海にせりだして立つ湯屋の女中部屋に沿った廊下の手すりにもたれて、おまんじゅうを食べている。部屋の明りは消してある。最初の日の夜空は真っ暗だったが、この日の夜空は明るい。丸い月が出ている。雲がたなびいている。雨が降って大地には海ができた。水は透明で水底が透けてみえる。その中を電車が静かに走り去り、赤い尾灯^{びとう}を千尋たちに向ける。

ここは海の底ではなかろうか。そう思うのは、あたり一面が水であるという単純な理由からである。『千と千尋の神隠し』の世界は、川に水が充満したことによって現出した世界であり、水に満ちた世界である。湯屋の浴槽にはお湯が溢れかえっている。ハクは川の神であった。

大地は水で覆われているが、その水は底が透けて見えるほど透明である。通常、雨が大量に降ると、山から土砂が流れ下り大地は泥水に覆われるが、ここの水が透明なのはなぜなのだろう。そもそもこの世界には山がない。川はどこから流れてくるのだろうか。水は山から流れ下ってくるというよりは、雨が静かに降り積もった結果できた水である。ここは海の底にしかみえないのだ。

このような印象だけでは『千と千尋の神隠し』の世界が海の底にあることの証拠とはならない。このことを論証するために、『古事記』で描かれる「水の国」を舞台にした話—海神の宮を探訪した山幸彦の話—をみてみよう。この話と『千と千尋の神隠し』との共通する話型を通じて、『千と千尋の神隠し』の世界が「水の国」であることが明らかになると思う。

『古事記』⁵で語られるのは、山幸彦が、海に落とした兄の海幸彦^{つりぼり}の鉤を取り戻すために

「綿津見神の宮」を訪れた話である。そこで海神の娘の豊玉姫と結婚し3年間そこにとどまる。3年たったとき、山幸彦は海神の宮を訪れた理由を思いだし、嘆き悲しむ。その訳を聞いた海神は、鯛の喉から鉤を取りだし、山幸彦に渡した。それとともに、潮を満ちさせる「鹽盈珠」と潮を引かせる「鹽乾珠」を授けた。地上に戻ると、山幸彦はその珠を操って兄の海幸彦を屈服させた。

まず、海神の国が、海の彼方というよりは、海底にあると考えられていた⁶ということ指摘する必要がある。

海神の国が海底にあるという事実は、山幸彦が海神の宮を去ろうとするとき、海神がワニを呼び集めて次のようにいったことにあらわれている。

今、天津日高の御子、虚空津日高、上つ國に出幸でまさむとしたまふ。誰は幾日に送り奉りて、覆奏すぞ。⁷

「上つ國」への旅のお供をしたのは、一日で送っていくことができると豪語した「一尋ひとひろ鮫」であった。海神はそのワニに向って、「海中」を渡るときには恐ろしい思いをさせるなよと注意を与えた。

「海中」は恐ろしい場所だが、海底では、豊玉姫の婢が水をくんでいるのであるから、別の種類の空間が広がっているという世界観なのであろう。浦島太郎が海底にある乙姫様の竜宮城で息をして過ごすことができたように、綿津見神の宮も人間が住むことができる空間なのである。

この話と『千と千尋の神隠し』との共通した話型とは、異郷を訪れた人が、そこで異性と出会い、ある年月を過ごし、贈り物をもらって帰還するという話型である。これは、浦島太郎の話も分けもっている話型である。贅が尽くされた竜宮城で楽しい時を過ごした浦島が地上に帰らなければならないという、乙姫様は玉手箱を贈り物として授けてくれた。

玉手箱が一体何をあらわしているかは、はなはだあやしい。それは浦島に禍福のどちらをもたらしたのか。乙姫は浦島にとって恋愛の対象なのか。浦島太郎伝説には数々の異本が存在し、それによって話がかなり異なるが、ここでは詳細には立ち入らない。ただ、浦島と乙姫の関係と、山幸彦と豊玉姫の関係が、同じ構造のなかにあるということを指摘するにとどめておこう。

千尋が異郷で出会った異性はハクである。ハクは、山幸彦にとっての豊玉姫、浦島にとっての乙姫様と同じく、異界にある千尋の味方になり彼女が苦難を切り抜けて両親とともに元の世界に戻ることができるよう、手助けしてくれた。

ハクと千尋の関係は、山幸彦と豊玉姫のように、結婚そして出産へと至る、性的な関係性を示唆してはいないが、千尋がずっと小さい頃、川に落とした靴を拾おうとして溺れそ

うになったとき、川の神のハクが彼女を浅瀬まで導いてくれたことは、お互いにとってなつかしい思い出であった。千尋がその記憶を呼び戻したとき、ハクは自分の本当の名前—ニギハヤミコハクヌシーを思いだし、自らのアイデンティティーを取り戻したのだ。

千尋がもらった贈り物は、^{ぜにーば}錢婆からもらった紫色の髪留めである。ハエドリとネズミとカオナシも手伝って糸を編んで作ったものだ。その髪留めがどんな役に立つかはわからないが、両親とともに再びトンネルを抜けて元の世界に戻ったとき、千尋が元気いっぱいだったのは、髪留めのおかげかもしれない。それが唯一、彼女が別の世界で時を過ごしたことの証であったからだ。何ももって帰らなかったら、彼女は、本当に自分がそんな経験をしたのかどうか、もしかしたらすべては夢だったのではないかと疑念を抱くかもしれない。

これは『不思議の国のアリス』との大きな違いである。アリスは夢のなかにいたわけだから、もちろん、何ももって帰ってはこない。目が覚めると、お姉さんに、夢のなかで経験した様々な冒険を語って聞かせた。そのあと、お姉さんに、「お茶の時間だから行きなさい」といわれて、「すばらしい夢だったわ」と思いながら、走り去っていく。これが夏の冒険で、冬には鏡の国での冒険をやはり夢のなかで経験する。双方において、アリスは自分の経験したことが夢であることを重々承知している。

贈り物の効果は絶大である。山幸彦がもって帰ってきたふたつの「珠」は、本来なら、海幸彦の持物となるべきものではある。しかし、田畑を洪水で流されることなく、また、干ばつで干上がらせることなく、収穫物を得るために、山は海を支配下に治めなければならない。そのための珠なのである。別のいい方をすれば、豊饒をもたらす珠である。豊饒は豊玉姫との間に幾人もの子供ができたことにもあらわれている。

海底に行って異性に助けられ贈り物をもらって帰ってくるという、山幸彦の冒険のパターンを、千尋は踏襲している。とすれば、千尋が訪れた国が水の国であることを否定する理由は何もない。実際、水で満ち溢れているのであるから。

千尋の国が水の国であることの必然性は、それが豊饒の国であることにある。山幸彦が水の国からもって帰ってきたものは、地上に豊饒をもたらす珠であった。すると、千尋が得た贈り物も、豊饒なのであろうか。次節で、海底の国は、地上に豊饒をもたらす「根の国」、すなわち豊饒の国であることを論証する。

2 『千と千尋の神隠し』は根の国、母の国

海底の国が根の国であり、根の国は海底の国であることを証明するために、西郷信綱が『古代人と夢』において着目するのが、海幸彦・山幸彦の神話とオホナムジの神話との相似性、さらに、オホナムジの神話とイザナギとイザナミの神話との相似性である⁸。以下で、西郷の議論に拠りながら、詳細をみてみよう。

オホナムジは兄弟の^{やそ}八十神の迫害を逃れて、スサノオのいる「^{かたす}根の堅州國」に向った。

そこでスサノオによって数々の試練を与えられるが、スサノオの娘のスセリ姫に助けられて、見事に切り抜ける。そして、生大刀^{いくたち}、生弓矢^{いくゆみや}、天の詔琴^{あめののりこと}を手にし、スセリ姫を背負って、黄泉比良坂^{よもつひらさか}をこえて、走って逃げる。

「異性」と「贈り物」⁹という点で、山幸彦の神話また千尋の冒険と共通した構造をもっているこの話において、「根の国」が海にあるかどうかは、明らかに記されてはいない。オホナムジは、このあと、名を変えて、大国主神^{おおくにぬし}となる。根の国訪問を通じて、新たな誕生と繁栄がもたらされたのだ。山幸彦の海神の国同様、その根の国が海の国であることの証拠となるのは、オホナムジの神話が山幸彦の神話と共通した型^{さい}をもっていることに加えて、イザナギとイザナミの神話にも登場する「黄泉比良坂」と「賽の河原」との関連性である。

「黄泉比良坂」とは、イザナギが黄泉の国で追ってくるイザナミに対して、「千引^{ちびき}の石^{いは}」を「引き塞^さへ」た場所である。西郷は、この「塞へ」という言葉と「賽の河原」との関連性を指摘する¹⁰。「賽の河原」はのちに仏教説話¹¹の場に変容するが、ここでは、それが河原であるということが重要なのである。

「黄泉比良坂」と「賽の河原」とが同一の場所であるとする、「黄泉比良坂」とは、文字通りの坂というよりは、石によって塞^{ふさ}がれた河原でもある、ということになる。オホナムジが訪れた根の国は、黄泉比良坂を入口・出口として地上世界とつながっているのであるが、そこは海の河原であったのかもしれない。ということは、根の国は海にあるということになる¹²。

オホナムジの根の国、山幸彦の綿津見神の宮、千尋の油屋—この3つの場所と3つの冒険を並べてみたとき、同じ話型をもっているということがわかるであろう。前節でも考察の対象とした話型—海底にある異郷を訪れ、異性に助けられながら冒険を完了し、贈り物をもって帰る—である。

根の国、海神の国、湯婆婆^{ゆばば}の国—これらは、河原の境界を通り抜けたところにある水の国である。大地の下の木根が海底にも伸びていると想像すれば、水の国が根の国であることは矛盾することではない。また、海は豊饒の象徴であるから、大地の根源的な力が宿るとされる根の国の舞台となるのは驚くにはあたらない。実際、中上健次が『紀州—木の国・根の国物語』(1978年)において、紀州を「根の国」と呼ぶように、根の国とは山に抱かれながらも海が迫る、そんな国であった。オホナムジの神話の舞台となったのは出雲である。やはり海がある場所である。根の国は海の国であるのだ。

千尋が訪れた異郷は、水の国であったが、それは同時に根の国でもあり、豊饒の国であった。海は「母なる海」として、古くから誕生と再生の場所とみなされてきたということを考えれば、千尋の異郷が「水の国」であると指摘した時点で、それが豊饒の国であるという特色を導きだすには十分であったのかもしれない。千尋の異郷が豊饒の海原であることは、『古事記』においてオホナムジと山幸彦に繁栄をもたらした国々と関連づけられる

ことによって、より説得力をもったのではないかと思う。

「母なる海」という言葉を出したついでに、少し寄り道をして、『千と千尋の神隠し』の水の国が、否定的な意味でのグレート・マザー、湯婆婆と銭婆が支配する海であることを指摘し、さらに、『千と千尋の神隠し』の心理学的・精神分析学的解釈を瞥見^{ベツケン}してみたいと思う。その目的は、千尋の異郷が「水の国」「根の国」であることにさらに説得力をもたせようとするのではない。『千と千尋の神隠し』が千尋の成長の物語であるということが、今までしばしば指摘されてきたので、その点について触れておく必要があると思うからである。

湯婆婆と銭婆は「多産、肥沃、豊饒をもたらす大地の象徴」であり、「地母神」の役割をもっている¹³。この国は女性性に満ちている。清水正がいうように、父性的な存在としては、釜爺やカエルがいるが、釜爺は「〈女性性器〉の隠喩である〈釜〉をいつも赤々と燃えたぎらせておかねばならない」し、帳場を預かるカエルは完全に湯婆婆の支配下におかれている¹⁴。

異郷が母の国として表象されるのは驚くことではない。一神教であるキリスト教の世界観において、父性原理としての神がおはします天上とは、決して人間が訪れるべき場所ではない。当然、誰かがそこを訪れて帰ってきたという話はない。女性的な場所とは、キリスト教からすると異教的な場所であり、海や大地のような豊饒の源であり、別のいい方をすれば、混沌とした場所でもある。混沌であるからこそ、そこから何かが生れてくるのである。

それゆえ、千尋の冒険は「母胎回帰」であるともいえるのだが、そのような観点から『千と千尋の神隠し』を解釈している論考があるので、みてみよう。

木部則雄は、精神分析学者メラニー・クラインの理論を援用して、『千と千尋の神隠し』には、思春期の女の子が、母親とのライバル関係を克服し、ひとりの女性として自立していく旅が描かれていると論ずる¹⁵。男の子が母親に対する欲望を父親との同一化によって克服するのに対し、女の子は父親への欲望を母親によって破壊される。理想を失った女の子は、母のようになるか、母のようにはならないかの二者択一を迫られることになる。母胎回帰の比喩としてみると、千尋があちら側に行くために通り抜けるトンネルは産道、油屋の建物は母親の胎内、釜爺は「千尋の自立を助ける創造的な結合両親像」を象徴する¹⁶という解釈も納得できる。

山本政人は、『千と千尋の神隠し』を、「異界に踏み込んだ千尋が、援助者に助けられながら異界に適応し、さらに自己の主体性を確立していく」「成長物語」¹⁷であると論ずる。映画の冒頭では、引っ越しをして新しい学校に転校するのを嫌がり、ふてくされていた千尋が、油屋では、肉体労働に忍従し、オクスレ様を痛苦から解放し、カオナシの甘えを見抜き、ハクに真心を尽くした。それを通じて、自分が良いと思ったことをやり通す意志と

積極性を身につけたのであった。

後藤秀爾は、『千と千尋の神隠し』のテーマを「思春期の内的対象喪失とそこからのモーニングワーク（喪の作業）」であるとし、千尋が迷い込んだ不思議の世界は彼女の「無意識世界」とであると解釈する¹⁸。千尋の無意識のなかにあって、坊は「他者操作の欲求のみが肥大化した子ども」、カオナシは「母親との一体化願望」を抱えてコンプレックスに苦しむ人である¹⁹。他の登場人物たちも心理学的見地からそれぞれの象徴性が付与されている。

オホナムジが根の国探訪を経て大国主神として生まれ変わったように、千尋は、不思議の国探訪を経て自立した女性として生まれ変わったのであろう。これも一つの解釈である。しかし、『不思議の国アリス』を、アリスが冒険を経て大人になる成長物語として読んだ場合、そこに表出されている、イギリスの伝統的な風俗習慣・カリカチュアされる同時代の社会・おとぎ話・童謡・唱歌・想像上の動物たち・話したりニヤニヤ笑ったりする動物たち・言葉遊び・ノンセンスなどがひとつの解釈のなかに窮屈に押し込まれてしまう感じがするであろう。それと同じように、『千と千尋の神隠し』のなかに、子どもたちへ向けてのメッセージ性を感じると、とたんにつまらないものに思えてくるのはなぜだろうか。もちろん、子どもたちがこの映画をみたときに、「千尋のようにやさしい子になりたい」と思うのはとてもよいことではあるが。

恐らく、私が感じる違和感は、心理学的解釈と文学的解釈との違いから生ずるのであろう。『千と千尋の神隠し』を文学として読んだ場合、そこに何らかのテーマをみいだしながらも、それだけに帰結させないのが文学的解釈であるのだと私は思う。

オホナムジ、山幸彦、千尋の共通性の話に戻ろう。

オホナムジと山幸彦は異郷探訪のあと、繁栄を手にしたが、このふたつの話とパラレルにするためには、千尋にも何らかの成果を手にしてもらわなければならない。「成長」でもいいのだが、それだと物語が薄っぺらになる。オホナムジと山幸彦の神話は、日本の建國神話であるので、彼らの個人的繁栄は日本国の繁栄の一部である。個人の冒険譚を超えて、大きな物語性が包含された話なのである。

千尋が得たものは豊饒ではだめだろうか。妖怪や神々が湯につかる世界で様々なことを経験する千尋をみて、我々観衆は、日本の伝統的思考の枠組みのなかに存在する、あちら側の世界とこちら側の世界との親和性を感じ、こちら側の世界のどこかに妖怪や神々がひそんでいるかもしれないとあたりをみわたり、暗くなっても遊んでいる子は天狗にさらわれるかもしれないという言葉が当たり前のように口にされた、昔をなつかしむ。千尋は我々に豊かな伝承世界を思い出させてくれた。これこそがこの映画の核心だと私は思う。千尋という個人の物語を超えて、この映画は、日本文化の再生に貢献したといえるのである。

3 あちら側の世界とこちら側の世界の境界線——『ナルニア国物語』と『千と千尋の神隠し』

この論考の主眼は、『千と千尋の神隠し』において、あちら側の世界とこちら側の世界の境界線が曖昧であることを検証することにある。比較対象として、『ナルニア国物語』をみてみよう。

ここでは、7巻からなるシリーズである『ナルニア国物語』をどのような順番で読むべきかという問題には立ち入らない²⁰。1950年に出版された1巻目の『ライオンと魔女と洋服だんす』²¹は、ペヴェンシー家の4人の兄弟姉妹、ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシーが、第2次世界大戦の空襲かまびすしいロンドンから逃れて、年老いた大学教授の田舎の屋敷に疎開したときに始まる。ルーシーが、がらんとした部屋の大きな洋服ダンスのなかに足を踏み入れると、毛皮のコートが何着もかかっていた。ダンスの中をずっと奥まで行くと、いつのまにか雪が降りつもる真夜中の森にいた。街灯の下でタムナスという名前のフォーン（上半身が人間で下半身が山羊の神話上の生物）に出会い、彼の家のティータイムによばれる。何時間も家をあけてさぞかしみんな心配しているだろうと、急いで帰ってきたルーシーは、こちら側の世界では1秒くらいしかたっていないことに気がつく。

その後、ペヴェンシー家の4人の子どもたちはみんなでナルニア国に行く。彼らは、アスランというライオンの導きによって、邪悪な白の魔女を倒し、冬に閉ざされていたナルニアに春を蘇らせることに成功する。4人は何年もの間王と女王としてナルニアに君臨するが、あるとき、狩りの途中で迷い込んだ森で、街灯を発見して、既視感におそわれる。彼らは枝をかき分けて進んでいるつもりがいつのまにか毛皮のコートをかき分けていた。次の瞬間、洋服ダンスから転がり落ちる。彼らは洋服ダンスを通り抜けてあちら側の世界に行った、同じ日の同じ時間に、子どもの服を着て、子どものまま、再びこちら側の世界に戻ってきたのであった。

第2巻の『カスピアン王子と伝説の角笛』において、こちら側の世界では1年がたった。4人は夏休みを終えて寄宿学校に戻るところだ。駅のベンチで列車を待っていると、何かに引っ張られるような感じがした。4人が手をつなぐと、次の瞬間、駅もベンチも荷物も消えて、彼らは森のなかにいる自分たち自身を発見する。再びナルニアに戻ってきたのだ。ナルニアでは何百年もたっていた。彼らはカスピアン王子を助けることに成功すると、アスランが3本の杭で作ってくれた門を通り抜けて、こちら側に戻ってくる。そして新学期が始まる。

第3巻の『竜の島と世界の果て』では、いとこのユースタスの部屋の壁にかけてある海と船の絵から突然こちら側に波が押し寄せてきて、ユースタス、エドモンド、ルーシーは飲み込まれてしまう。彼らは海の真ん中にいた。大人になったカスピアンが冒険のためにはるか波路を越えていた。旅の終りに、彼らは世界の果てに辿り着く。突然、東からそよ

風が吹いてきて、波が泡立ち、海がかき乱された。世界の果てのさらにその向こうにアスランの国があるようだ。ネズミのリープチーフは小さな舟に乗って、アスランの国とこちら側を隔てている波を駆け上がり、向こう側に消えていった。ユースタス、エドマンド、ルーシーの3人は、アスランが空に作ってくれた扉をくぐり抜けて、こちら側の世界に戻ってくる。

『千と千尋の神隠し』と比較するために重要となる3つの点を指摘したい。第1に、ナルニアのほう時間が時間の流れが速いが、正確な照応関係があるわけではない。第2に、ペヴェンシー家の子どもたちは、ナルニアがもうひとつの実在する世界であることを微塵も疑わない。第3に、彼らはあちら側の世界から贈り物をもらってはこないが、あちら側の世界に物を置いてくることはある。これら3つのポイントを通じて論証したいのは、ナルニアは神の国のメタファーとして存在しており、必然的に、現実世界と交わることはない、ということである。ナルニアと比較したとき明らかになるのは、『千と千尋の神隠し』の不思議の町は、何らかのメタファーではなく、現実世界と交わりながら存在する世界であるということである。以下で詳しく論ずる。

第1の点、時間の流れをみてみよう。『ライオンと魔女と洋服だんす』でルーシーが最初にナルニアに行ったときの何時間もの時間と、4人がナルニアで過ごした何年もの年月は、こちら側の世界ではほんの一瞬だった。ルーシーがタムナスとのティータイムその他で5時間過ごし、そのあと4人がナルニアで10年過ごしたと考えてみよう。ナルニアの5時間がこちら側の1秒だとすると、ナルニアの10年はこちら側の17,520秒、すなわち4.8時間である。4人の姿が5時間程度見えなかったところで、老教授は心配しないだろうから、これは矛盾しない。しかし、この計算式を採用すると、『カスピアン王子と伝説の角笛』において、こちら側で1年たったとき、ナルニアでは18,250年程度たっていることになる。これはおかしい。

『竜の島と世界の果て』では明確に1年たったとは書いていない。『カスピアン王子と伝説の角笛』でナルニアに行ったのが、新学期が始まる前だった。『竜の島と世界の果て』で、エドマンドとルーシーがいとこのユースタスの家に預けられたのは、夏にお父さんがアメリカの大学に講義をしにいくからだだった。すると、やはり1年近くはたっている。それなのに、再会したカスピアン王子はいまだ青年である。これもおかしい。

実は、こんな風に計算してみるまでもなく、作者が次のように説明している。

ナルニアでの時間のたちかたは、私たちの世界とちがっています。ナルニアで百年すごしても、こちらの世界へもどってくると、こちらの世界を旅立ったまさにその日のその時刻へもどってこられるのです。逆に、こちらの世界で一週間してからナルニアへもどると、ナルニアでは千年がすぎているかもしれませんし、あるいは一日だけがすぎていたり、ぜんぜん時間がたっていなかったりするかもしれません。そこへ行っ

てみないとわからないのです。²²

時間の流れは均一ではないのである。

『千と千尋の神隠し』ではどうだろうか。千尋と両親が再びトンネルを抜けたとき、赤色だったはずのトンネルは白い石積みで、草に覆われていた。車の上にも草の葉や枝がたくさん落ちていた。一体、何日あそこにいたのか、彼らは行方不明者として搜索されているのではないかと我々は心配してしまう。もしも、ナルニアにおけるように時間の流れが速くて、長い時間を過ごしても、こちら側の世界ではほんの一瞬であるのなら、都合がよい。しかし、トンネルと車の変化をどう説明したらよいのか。逆に、浦島の話のように、あちら側の世界の時の流れがゆっくりとしているために、こちら側に戻ってきたときに故郷の風景が一変しているというパターンもありうる。少なくともトンネルはかなりの年月を経た感じがする。

この疑問に明確な解答を与える必要があるのなら、前者のパターンであろう。こちら側ではほんの一瞬の時しかたっていないのだ。さらにいえば、『ライオンと魔女と洋服ダンス』において、ナルニアへの入口・出口として機能した洋服ダンスは、まさしくそこできっかり世界がふたつに分かれる境界線ではなかった。洋服ダンスを通り抜けた先にある街灯がナルニアの国境であった。『千と千尋の神隠し』においても、トンネルを入口・出口としながらも、その前にある石の祠ほこらのあたりまでをあちら側の世界の領域とみなすこともできるであろう。

しかし、フィクションの世界の詳細を、あたかもリアルな世界であるかのように、論理で突きつめていく必要はない。フィクションのなかに説明できない部分が残るのは当然である。それは、そのフィクションのほつれではない。フィクションとは表象であるからである。あることを描くことによって、そのこと自体に加えて、またはその代わりに、何かのメタファーとして機能させるのである。現実世界で急に風景が変化していたら、地震で山崩れが発生したのか、夜中に突貫とっかん工事をして新しい建物を建てたのか、何か理由がある。しかし、アリスが不思議の国で、体が大きくなったり小さくなったりするとき、「服も一緒に伸び縮みするのは変だ」と指摘することに意味はない。ファンタジーの楽しみであるとともに、不思議の国の無秩序と混乱の表象でもあるからである。

『千と千尋の神隠し』において、出ていくときのトンネルは、入ってきたときとは違うトンネルでなければならなかった。宮崎監督の絵コンテには、トンネルに関して、「入った時とはちがう、いかにものトンネル」という注釈がついていたそうだが²³。現実世界における事象の連続性とは関係なく、トンネルによってあらわしたいものがあったのである。それは、「変化」であろう。映画の始まりと終わりでは何かが変化していた。もちろん、千尋の心が充実感で満たされたということもある。また、前述したように、聴衆が日本文化の豊かな伝統の泉の水を分け飲んだということもある。様々な変化である。

『ナルニア国物語』に戻ろう。フィクションをリアリスティックに考えてはいけないといいながら、リアリスティックに考えると、数々の疑問点がある。『カスピアン王子と伝説の角笛』においては、そろそろ帰る時がきたと思ったピーターがみんなの服をもってきていたので、木の後ろで服を着替えて、3本の杭でできた門をくぐり抜けた。しかし、『ライオンと魔女と洋服だんす』において彼らは王と女王として狩りをしている最中に再びこちら側に戻ってきたので、もとの服はなかった。でも洋服ダンスを通り抜けたとたんにもとの服を着ていた。それだけでなく、何年もの間に生じたはずの体の変化は一瞬にしてなかったことになる。

これは、同時に走るふたつの世界が存在するという解釈では説明がつかないことである。一言でいえば、ナルニアはメタファーなのである。聖書の時間観に沿って、天地創造から世界の終りまでをミニチュア版として表現したのがナルニアだ。6番目に出版された『魔術師の甥』で天地創造が語られる。『竜の島と世界の果て』においては、コペルニクスによって唱えられた地動説以前の世界観における、世界の果てが、海が終わってそこからは何もない場所として視覚化されている。

『竜の島と世界の果て』で、エドモンドとルーシーはもう二度とナルニアに戻ってくることができないと知って悲しむが、アスランは、人間世界でも自分と会うことができるといって彼らを慰める。

そこでは、私は別の名で呼ばれている。きみたちは、その名前で私を知らなければならぬ。だからこそ、きみたちはナルニアへつれてこられたのだ。ここで少し私のことを知れば、きみたちの世界で私のことがずっとよくわかるようになるだろうから。²⁴

説明を加える必要もないが、アスランは人間世界ではイエス・キリストと呼ばれている。ナルニアにおけるアスランとは、キリストのメタファーであるのだ。

ナルニアの時間が均一ではない理由は、神の時間は一瞬であると同時に人間の時間と同様に直線的に流れてもいるからである。神の時間は、人間の目から見ると、ある意味、矛盾しているのだ。

『ナルニア国物語』においては、人間が住む現実世界と、キリスト教的時間観を表現したナルニアというメタファーの世界が、ふたつの異なる層となって、重なっているのである。これは、上で挙げた第2のポイントーナルニアの存在は疑われないーとも関連してくる。ナルニアの存在は確固たるものである。神を信じる心が創造したナルニアの存在を誰が疑うことができるのか。

ナルニアは、アダムとイヴが禁断の木の実を食べたことによって失った、innocenceをもった子どもたちしか招じ入れられない。innocenceをもっている子どもは、ナルニアの存在を疑うことを知らない。実際、エドモンドがルーシーのいったことを信じなかったと

き、洋服ダンスを開けてもそこにはただコートがぶら下がっているだけだった。ナルニアとは、キリスト教信者の心の中にある神の国なのである。

厳しい父性原理に基づいたキリスト教の神は、人間の贖罪^{しよくざい}と信心を求めるが、個別の人間に贈り物をするのではない。ここで、上で挙げた第3のポイント、贈り物に関して論じる。

『ライオンと魔女と洋服だんす』では、ペヴェンシー家の4人の子どもたちは、冬の国に降り立ったとき、あまりの寒さに洋服ダンスから毛皮のコートを拝借した。帰るときにはそれは忘れ去られていた。『カスピアン王子と伝説の角笛』では、エドマンドが誕生日プレゼントの懐中電灯をナルニアに置いてきた。これらの忘れ物は、人間が神の国の存在を忘れることなく時折訪れた、記念の品として、ナルニアにとっては重要なものとなるであろう（これらの忘れ物がその後どうなったかは言及されない）。

山幸彦やオホナムジがもらって帰ってきた贈り物は、こちら側の世界で彼らの繁栄を築くのに大いに役立ったが、ペヴェンシー家の4人の子どもたちがアスランから何か呪術的な贈り物もらって帰ってきて、学校で良い成績をとることや、欲しい服を無尽蔵に取りだすことに役立てたりしたら、傲慢もしくは強欲ということになろう。ふたつの世界は交わることなく、メタファーの層として存在しているので、あちら側から物や人がもたらされることはない。

山幸彦やオホナムジ同様、千尋が異郷から贈り物をもらったのは、神々や妖怪が住む異郷がこの現実世界と切れ目なく存在していて、どこかに神々や妖怪が私たちと区別なく生きているかもしれない世界においてのみ可能なのである。異郷からもたらされた呪具は、日本の昔話や伝説でしばしば登場するアイテムである。

小松和彦²⁵が、俵^{たわらの}藤太^{とうた}こと藤原秀郷^{ひでさとむかで}の百足退治と龍宮訪問、そしてそこからの種々^{くさくさ}の贈り物に関して、『俵藤太絵巻』によって説明しているので、みてみよう。秀郷の前に現れた大蛇は龍宮の主であった。秀郷は、年来争っている百足を退治してほしいと頼まれた。見事に勝利をおさめると、龍宮に招待される。歓待を受けたあと、帰る秀郷に与えられたのは以下のような贈り物であった。太刀、鎧^{よろい}甲^{かぶと}、弓箭^{きゅうせん}、鎌、旗、幕、鍋、包丁、俵^{まき}、巻絹^{まきぬ}、砂金袋、童子など。このうち、俵とは、「取っても取っても米が尽きることはない不思議な米俵」、「巻絹」とは、「切っても切ってもなくなる不思議な巻絹」、「砂金袋」も「無尽蔵」、「童子」とは、「主人の心中を知り命令しないのに用をたしてくれる」²⁶ 子どもである。このような伝説が流布したのは、秀郷とその子孫の繁栄を寿ぐという目的があったのであろう。そのために異郷からの贈り物という権威づけを行ったのだ。

異郷からもたらされた呪具は、こちら側の世界にいる人間に権威を与えてくれる。異界という後ろ盾の存在を示すことによって、その人が他とは異なる偉大な人であることを証明するからである。実際は、呪具のゆえに偉大なのではなく、偉大だから呪具という物語をあとづけしたのであろうが。

千尋にとっての紫色の髪留めは、彼女が他とは異なる特別な人間であることを証明するものである。銭婆のセリフ「みんなで紡いだ糸を編み込んであるからね」―は、千尋が人々に愛され、また、人々を愛することを忘れない、やさしい子でいるためのお守りである。千尋には守ってくれる異界の神々がいることを示す印である。

4 夕闇にまぎれて

『千と千尋の神隠し』において、あちら側の世界は川に水が満ちるとともに出現したが、それは、夕闇が迫りくるときであった。前述したように、夕闇は、薄暮を経ることなく急速にあたりを覆いつくした。あちら側の世界とこちら側の世界の境界線とは、空間的であるだけでなく、時間的でもあることがわかるであろう。

夕暮れの危険性に関して、柳田国男も『山の人生』のなかでいっている。

東京のような繁華の町中でも、夜分だけは隠れんぼはせぬことにしている。夜かくれんぼをすると鬼に連れて行かれる。または隠し婆さんに連れて行かれるとって、小児を戒める親がまだ多い。²⁷

『山の人生』は大正 15 年が初版であるから、かなり昔のことではある。柳田は、子どもが急にいなくなる現象に関して取材していて、農村では、麦の刈入れ時が一番危ないという。高く成長した麦のかげに子どもが隠れてしまうからである。「隠し婆さん」とは、子どもを盗んで血や油をとってから殺す、おそろしいお婆さんだということだ。地方によっていろいろな「伝統的不安」²⁸があったと柳田はいう。先に、昔は子どもが天狗にさらわれるといったものだったといったが、これは私の生れ故郷の新潟県の山のほうの言い伝えなのかもしれない。

夕暮れが危険なのである。

古くから日本では日暮れどきを^{おう ま が とき}逢魔ヶ刻と呼んだ。薄暮の状態ではヒトだか化けものだか区別がつかなくなる。^{だれ かれ}誰が彼だか分からないから、夕暮れは^{た かれ}「誰そ彼」どきなのである。²⁹

時間的な側面から異郷を考えるにあたって、異界探訪が実は夢であったというオチで終わる話をみてみよう。空間を移動したのではなく、ある一定の時間、夢という異なる意識の様態において異界を訪れた話である。前節で呪具を論ずる際に依拠した小松和彦が別の本―『神隠しと日本人』³⁰―において、「源五郎の天昇り」という昔話を紹介している。傘屋の男が庭で傘を干していたとき、風が吹いて傘を吹きとばされた。そのとき源五郎も一緒に飛ばされて雲の上に行った。そこには雷がいた。雷は源五郎に雨を降らせるのを手伝

えという。源五郎はおもしろくなって一生懸命手伝っているうちに足を滑らせて雲の上から落っこちた。屋根の上に落ちたとき、眼がさめて、夢だったことに気がついた。

『千と千尋の神隠し』の出来事も、千尋の夢であると解釈することも可能かもしれない。現実世界ではありえないことを描くとき、それを夢だとして言い訳をすることはよくある。いわゆる「夢オチ」である。上記の源五郎の話も、「夢だった」という部分を省略してもいいのかもしれないが、信じてもらえないことを危惧して、夢だったというオチをつけているのであろう。

『不思議の国のアリス』と較べてみよう。アリスはお姉さんが読んでくれる歴史の本が退屈なのでウトウトしていた。すると、目の前をウサギが走り抜けた。そのウサギがチョッキを着ていて懐中時計を覗き込んだ。そこでアリスはウサギを追うことにした。ウサギが穴に飛び込んだので、アリスも穴に飛び込む。随分長い間ゆっくりと落ちていったような気がした。ドスンと下に落ちてから、アリスの冒険が始まる。小さなドアの向こう側にある美しい庭を見つけたアリスは、そこに行きたいと思うが、体が大きすぎてドアをくぐり抜けることができない。すると、都合よく、テーブルの上に“Drink me”というボトルがあった。それを飲むと体が小さくなったのはよかったが、何と、ドアの鍵をテーブルの上に置いてきてしまって、小さくなったアリスはとることができない。すると、次は……という感じのお話である。

最後は、タルトを誰が盗んだのかという裁判の場面。いつのまにか体が大きくなってしまったアリスは、飛びかかってくるトランプの兵士たちを払いのけていたはずが、気がつくと、川べりでお姉さんの膝の上で寝ていて、お姉さんが、アリスの顔の上に落ちてくる枯葉を払いのけていたのだった。

ここでは、夢と現実とは曖昧性を排除されたふたつの異なる存在の様態として提示されている。他方、上記の源五郎の話において、「夢だった」というオチには、3つの可能性がある。1) 本当に体験したことだと本人は確信しているが、信じてもらえないだろうから、夢だといっている。2) 本当に夢である。3) 自分でもよくわからない。

もし『千と千尋の神隠し』が千尋の夢だとしたら、その夢とは、現実のなかに浸食し、現実の一部を自らの領域とする不可思議な夢となろう。千尋が仮にトンネルの前でうたた寝をしているときにみた夢だったとすると、それでもトンネルの向こう側には夢の領域が空間としてまた時間として存在する、そんな類^{たぐい}の夢であろう。すなわち、夢だと考えるのには無理があるのである。

『千と千尋の神隠し』には英語の吹き替え版がある。冒頭の場面で、千尋が湯婆婆に向って、「ここで働かせてください！」と連呼し、湯婆婆がそれに対して怒り狂う。その湯婆婆のセリフに、「お前の親は何だい。お客様の食べ物を豚のように食い散らして。当然の報いさ。お前ももとの世界には戻れないよ」というのがある。その最後の文、「お前

ももとの世界には戻れないよ」を、英語では、“You should be punished too”と訳している。「お前ももとの世界には戻れないよ」の「もとの世界」のニュアンスをくみ入れようとする、“You couldn't return to your original world”となるであろうが、そうすると、“original world”の意味が不明になる。英語ではその世界観が存在しないからである。

このセリフは、あちら側の世界とこちら側の世界とは混在していて、ふとした拍子であちら側に迷い込んでしまう、そんな世界観においてのみ意味をもつセリフである。『雨月物語』で語られる「浅茅^{あさじ}が宿」のように、久方ぶりに妻のもとに帰ったと思った男が、実は幽霊となっていた妻の歓待を受けていたという話もそうである。または、美しい女性にさんざんいい思いをさせてもらったと思った男が実は狐に騙されていたという話も各所にある。千尋も、すてきな男の子だと思っていたら実は川の神であったことを発見するわけだ。

千尋が迷い込んだ不思議の町は、『不思議の国のアリス』のような夢のなかではない。また、『ナルニア国物語』のようなメタファーとしての神の国ではない。夕闇とともに突如出現した水の国、母の国、豊饒の国であった。千尋はそこから贈り物^{なんどき}をもち帰って、元気いっぱいになった。その国との境界線は曖昧であるから、我々もいつ何時紛れ込んでしまうかもしれないのだ。

注

- ¹ 清水正『宮崎駿を読む―母性とカオスのファンタジー』（鳥影社、2001年）、18頁。
- ² 藤本憲太郎「宮崎駿監督作品「千と千尋の神隠し」における建築のファサードの果たす役割について」、『関東学院大学人間環境学会紀要』第4号（2005年7月）、93頁。
- ³ 「美術監督・種田陽平が語る―「不思議の町」の構造を探る（聞き手：金澤誠）」、『キネマ旬報』No. 1338（2001年8月下旬）、42頁。
- ⁴ 切通理作『増補決定版 宮崎駿の〈世界〉』ちくま文庫（筑摩書房、2008年）、404頁。
- ⁵ 倉野憲司校注『古事記』岩波文庫（岩波書店、2000年）、71-78頁。
- ⁶ 西郷信綱『古代人と夢』平凡社ライブラリー（平凡社、2010年）、139頁。
- ⁷ 『古事記』75頁。「虚空津日高」とは、「皇太子に相当する日の御子の尊称」（『古事記』注、72頁）。
- ⁸ 西郷、137-39頁。
- ⁹ オホナムジはこれらの品々を勝手にもってきた。しかし、スサノオは、逃げるオホナムジに向けて、「その大刀と弓で、兄弟たちを追い払え」と叫び、エールを送ったので、「贈り物」となったのである。
- ¹⁰ 西郷、138頁。
- ¹¹ 親に先立って死んだ子供が、^{さんず}三途の川の河原で父母の供養のため石を積んで塔をつくろうとするが、鬼に壊されてしまう。最後には地藏菩薩によって救われる。
- ¹² 黄泉の国も海の底にあることになる。千尋の不思議の町は黄泉の国の様相も呈しているのだが、この論考では、紙幅の都合上、そのトピックに触れない。

- ¹³ 三浦直枝『「千と千尋の神隠し」は個性化の過程であった—ユング心理学に基づく、神話とマンガの視点から』(青山ライフ出版、2016年)、35頁。
- ¹⁴ 清水、93-94頁。
- ¹⁵ 木部則雄「クライン派の精神分析入門—こどもの心的世界から 第5回『千と千尋の神隠し』—女性化段階について」、『臨床心理学』61(第11巻第1号)(2011年1月)、102-104頁。
- ¹⁶ 木部、104頁。
- ¹⁷ 山本政人『「千と千尋の神隠し」における成長』、『GYROS』10号、特集「アニメ文化」(勉誠出版、2005年1月)、154頁。
- ¹⁸ 後藤秀爾「現代社会と思春期モーニング—「千と千尋の神隠し」への分析心理学的考察」、『愛知学泉大学コミュニティ政策学部紀要』第6号(2003年12月)、64-65頁。
- ¹⁹ 後藤、72-74頁。
- ²⁰ 出版順は、*The Lion, the Witch and the Wardrobe* (1950), *Prince Caspian* (1951), *The Voyage of the Dawn Treader* (1952), *The Silver Chair* (1953), *The Horse and His Boy* (1954), *Magician's Nephew* (1955), *The Last Battle* (1956) である。ハーパーコリンズから出版されている7巻本は、年代記としての解釈を採用し、*Magician's Nephew*, *The Lion, the Witch and the Wardrobe*, *The Horse and His Boy*, *Prince Caspian*, *The Voyage of the Dawn Treader*, *The Silver Chair*, *The Last Battle* の順にしている。
- ²¹ 巻の題名及び引用は、以下の、角川つばさ文庫のものを使用した。河合祥一郎訳『新訳 ナルニア国物語 ①ライオンと魔女と洋服だんす』(株式会社KADOKAWA、2021年)、同『新訳 ナルニア国物語 ②カスピアン王子と伝説の角笛』(株式会社KADOKAWA、2018年)、同『新訳 ナルニア国物語 ③竜の島と世界の果て』(株式会社KADOKAWA、2021年)。他の巻に関しては筆者訳。巻の順番は、出版順とした。
- ²² 『新訳 ナルニア国物語 ③竜の島と世界の果て』、22頁。ただし、ルビをはずして引用した。以下、同様。
- ²³ 正木晃『「千と千尋」のスピリチュアルな世界』(春秋社、2009年)、24頁。
- ²⁴ 『新訳 ナルニア国物語 ③竜の島と世界の果て』、293頁。
- ²⁵ 小松和彦『異界と日本人』角川ソフィア文庫(株式会社KADOKAWA、2015年)、62-74頁。
- ²⁶ 小松、71-74頁。
- ²⁷ 柳田国男『遠野物語・山の人生』岩波文庫(岩波書店、2001年)、117頁。
- ²⁸ 柳田、118頁。
- ²⁹ 「荒俣宏が語る「千と千尋」の世界背景—ヒトと妖怪の混浴風呂」、『キネマ旬報』、39頁。
- ³⁰ 小松和彦『神隠しと日本人』角川文庫(角川書店、2002年)、170-71頁。